
鬼ごっこ

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼ごっこ

【Nコード】

N8262H

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

「ねえ、名探偵。鬼ごっこしない？」新一に向かって怪盗が言い放った一言から始まるちよっとしたコメディーちっくな小噺☆お久しぶりでございます！ちよっとしたりハビリもこめて、短い連載を書いてみました☆お楽しみいただけたら嬉しいです（＊＾ー＾＊）

前編―side新―

「ねえ、名探偵。鬼ごっこしない？」

いつものように予告状が届いて、いつものようにその場所に向かって、いつものように現れたアイツが言ったのは、いつもと違う言葉だった。

元の身体に戻って、3ヶ月が経った。戻って最初の1ヶ月は、念のためということで学校に戻ることもせず自宅で過ごしていたけれど、早く学校に行きたかったから、灰原に「大丈夫だから」と言い聞かせて、2ヶ月前に復学することが出来た。

そして、どこから情報を手に入れたのか、その頃から届くようになった怪盗からのカード。

最初は「予告状か!？」と思ったけれど、暗号で書かれたソレを解いてみれば『復活おめでとう、名探偵』という単なる祝いだけで、ちよっと残念に思った。

確かに、自分は殺人専門だとずっと前から彼に言い続けていたし、そもそも、自分にまで予告状が届ける必要は無い。怪盗にとつての障害になる自分をわざわざ呼び出す必要も無い。……障害になれているというのは自惚れではないはずだ。

そのカードが届いたのは、奇しくも満月で、アイツの守り神とも言われている月に向かって柄にもなく

「わざわざサンキュ。暇つぶしにはなったぜ」

と、呟いた。まあ、5秒後には我に返って

「何やってんだ、オレ……」

と、自己嫌悪になったんだけど。

その日から、学校から帰るとポストにカードが入っていた。常に暗号で書かれたソレは、いい暇つぶしだった。内容は単なる日常会話で、『暑いですが、クーラーの温度設定には気をつけてください』とか、『きちんとご飯を食べてますか?』とか……、日常会話というよりは、世話焼き女房みたいな内容だった。

その中に、たまに時間と場所だけが書かれたものが混じる。初めてそのカードが届いたとき、その時間にそこに行ったら、アイツは普通に現れた。

久しぶりに見たけれど、何も変わっちゃいない。夜に身につけるには大胆な真っ白な服とシルクハット、右目に輝くモノクル、風にはためくマントとネクタイ、そして逆光でも分かるような口元に浮かんだ笑み。何もかもが記憶どおりで、変わらない姿に安心した。

「名探偵。お久しぶりですね。来ていただいてありがとうございます」

口を開いたのはアイツが先で、丁寧な胸に手を当て一礼した。

「答え合わせがしたかったからな」

「お楽しみいただけてるのですか?」

「ああ。何せ、天下の怪盗キッドお手製だからな」

「お褒めに預かり光栄ですよ、名探偵。きちんとお食事もとられるようで」

「余計なお世話だ、バーロ。——んじゃ、オレは帰るぞ。主治医が怖いからな」

「おや、私を捕まえないのですか？」

「前から言ってるんだろ。オレは殺人専門なんだよ」

そう言って、彼に背を向けた。

「……あ。暗号はまたくれよ？」

背を向けたまま、そう言い残し、その場を去った。その日はそれっきり。特に何も無かったが、怪盗は律儀にオレの願いを叶え続け、暗号は途絶えることもなく、たまに日時と場所のカードが届くことも変わりなく続いた。

そして今日。いつもは世間話のように穏やかな「来ていただいたありがとうございます」という怪盗の言葉から始まるのに、今日は違った。開口一番、『鬼ごっこしよう』と言ったか、アイツは。オレの耳がおかしくなったのか？

「……名探偵？」

小首を傾げたキッドに我に返る。

「オメー、今なんて言った？」

「だから、鬼ごっこをしない？　って」

「聞き違いじゃなかったのか……」

よかった、オレの耳は正常だ。至って普通だ。……って、そこじやねーだろオレ！

キッドはオレの内心の葛藤を知る由もなく、平然と話を続けた。

「思えばさ、名探偵と追いかけてっこそするのすごく楽しかったんだよねー。スリル満点っていうかさ。そういったこと思い出したら、またしたくなっちゃってさ」

「……………」

「……名探偵？　オーイ？　何か反応してくれないとキッド困っちゃうー」

無言のオレを不思議に思ってトコトコ近づいてきて、目の前で手を振っている白い人間は、間違いなく天下の怪盗キッドのはずだ。何気に今、嬉しいことを言ってくれたような気がするが、今はそれどころではない。

最初の呼び出しの時は敬語スタンスを貫いていたが、2回目からはオレが我慢できず、止めてもらった。コナンだった頃のくだけた口調の方が馴染みがあってよかったからだ。だが、これは違う。こんなふざけた話し方は神経を逆なでする。そもそも、こんなに近づいてきてオレが捕まえない確証はどこにある。

確かにオレは「捕まえない」と言ったが、余裕のありすぎるその態度がムカつく。

「……キッド」

「ん？ 何、名探偵」

「そんなに近づいて、オレに捕まりてーのか？」

「え、何がどうなってその結論？」

「うるせー！ 大人しく捕まりやがれ！」

「ちょ、ええ！？ タイムタイム！」

POM☆ と煙が弾けて、次の瞬間には7mほど離れたところに逃げてやがった。逃げ足の速いヤツめ。

「ちょっと待って名探偵。捕まれってどういう意味？」

「はあ！？ 意味も何も、そのままじゃねえか！」

「あ、さっきの鬼ごっこのことじゃなかったのね」
「？」

さっきのは冗談じゃなかったのか。

「……詳しく話せ」

「うーん……詳しくっていうか、そのままなんだけど。逃げるのはオレ、追いかけるのは名探偵。捕まえるのは……“昼のオレ”ってこと」

「……………は？」

「だからー、“昼のオレ”を捕まえてよ名探偵ってこと」

やっぱりオレの耳がおかしくなったのか？ いやいや、正常だ。おかしいのはヤツの頭だ。そうに違いない。うんうん、それなら納得できる。

「名探偵、すぐく失礼なこと考えてるでしょ」

「な、何で分かつ……や、何でもねえ。それより、理由は？ そんなこと言い出したのは理由あんだろ？」

「えー？ 理由ってさっき言ったじゃん。スリル満点って。またスリル味わいたくなっただの」

「……それだけ？」

「それだけ」

「……」

バカだな、コイツは。どこの世界に怪盗の正体を捕まえろって言う怪盗がいるんだよ。

「え、ココに」

「な、何でオレの考えてること分かるんだよ?!」

「いやいや、名探偵全部口に出してたし」

「……。冗談、とかじゃねーよな？」

「まさか。そこまでバカじゃねーよ？」

「……」

「あ、今その通りじゃねえか！ とか思っただろ。まあいいけど」

「いいのかよ！」

今日のコイツは何だか変だ。

「鬼ごっこのルールはいたって簡単。今日から3日以内に“昼のオレ”の前に現れたら名探偵の勝ち。無理だったら負けね」

「オメー、現れたら普通に認めるのか？ 自分が怪盗キッドだってこと」

「そりゃ、そういうルールですから？」

「“昼のお前”を知って、オレが警察に行かない保証あのかよ？」

まあ、多分行かないけど。

「名探偵はそんなことしないでしょ？ 現行犯ならともかくね。それに、ゲームに他人を介入させるのはいけないんだぜ？」

そこまでオレ、信用されてんだ？

「3日以内、ね。そんなに時間くれんだ？」

「余裕だねえ、名探偵。当てでもあんの？」

「企業秘密だ」

「楽しみにしてるよ、3日後。それじゃあ、今夜は失礼するね」

そう言いながらちょっと笑ったキッドは、ハンググライダーで帰っていった。

どこまで本気なのか分からないけれど、何となく……本当に何となく、この『鬼ごっこ』とやらを受けてやらねーといけない気がした。直感だから、確証なんてもちろん無い。

けど、アイツは何か……スリルとかいうものよりも、もっと欲しいものがあつたんだと思う。それが何なのかは分からないけど。

その答えを知るためにも、オレは“昼のアイツ”に会わなければならない。

前編―side新一―（後書き）

お久しぶりでございます。ペロコです。覚えてくれてる方がいらっ
しゃれば非常に嬉しいです。

さて、復活は夏ということで予定しておりましたが思った以上に何
かと時間が取れず、夏が終わる頃に登場することになったことをお
詫び申し上げます。

そして、復活したなら、手を出してる連載書けよ！ という突っ込
みもお受けいたします。ですが、すいません。思いついてしまった
ものを取り消すことが出来るほど、ペロコの脳内は簡単ではござい
ませんでした。

ので、欲望のまま投稿させていただきました。

このお話は、まあいきなり浮かんだったので本当に衝動のま
まなんです。

サブタイトルが「side新一」ということで、もちろんこの後に
は怪盗の方も続きます。

ので、詳しいことはココでは語らないです。期待した方いらっしや
いましたらスイマセン。

とりあえず、久しぶりということであ挨拶だけ……。

それでは、次は怪盗サイドでお会い出来ればいいなと思います。

執筆停止中にも関わらず、コメントを残してくださった方々、あり
がとうございます。後ほど、お返事させていただきます。遅くなっ
て申し訳ありませんでした。

前編―sideキッド―

「ねえ、名探偵。鬼ごっこしない？」

いつものように予告状を届けて、いつものようにその場所に向かって、いつものようにそこにいた名探偵に言ったのは、いつもと違う言葉だった。

きっかけなんて、単なる気まぐれだった。風の噂で、名探偵が学校に戻ってきたことを知って、一言だけでも挨拶しようと向かったものの、目の前に現れたらやっぱりダメかなどか思っ、カードだけ残すことにした。

でも、何だか帰り難くてそのまま工藤邸の屋根の上に留まっていた。ボーっと見上げた先には、ぼんやりと浮かんだ満月が浮かんでいて、あー、いい月とかしみじみと和んでいたら、カラカラとベランダの開く音がして、名探偵が出てきた。

風邪引くぞーと思って見てたら、

「わざわざサンキュ。ヒマつぶしにはなったぜ」

と、月に向かって呟く名探偵がいて、単純に嬉しかった。喜んでくれた。

まだ名探偵の中には怪盗キッドという存在が残っていて、悪く思っているわけではない、そのことが嬉しかった。

単純なオレが毎日のように名探偵の元へとカードを届けることにしたのは、まあ当然の流れだった。単なる日常会話のようなものだったけど、それでも何だか嬉しくて。

次第に直接会いたくなる自分が抑えられなくなった。日時と場所を示す暗号を名探偵に届けることにした。来てくれることと、来ていないことと2パターン予想しながら、ドキドキしながらその場所に向かったオレが、そこにいてくれた名探偵を見たとき、どれだけ嬉しかったか分かる？

思わず浮かんでしまった口元の笑みには気づかれたかもしれない。でも、そんなこと気にならなかった。

なぜか、ボーっと立ったままの名探偵を不思議に思いつつ、口を開いた。

「名探偵、お久しぶりですね。来ていただいてありがとうございます」

紳士の名を汚さぬように、胸に手をあて一礼する。

「答え合わせがしたかったからな」

「お楽しみただけてるのですか？」

「ああ。何せ、天下の怪盗キッドお手製だからな」

よかった。迷惑と思われてない。

「お褒めに預かり光栄ですよ、名探偵。きちんとお食事もとられて
いるようで」

「余計なお世話だ、バーロ。——んじゃ、オレは帰るぞ。主治医が
怖いからな」

え、もう帰っちゃうの？

「おや、私を捕まえないのですか？」

「前から言ってるんだろ、オレは殺人専門なんだよ」

そう言っ、背中を向けられた。あっさりしてるなあ相変わらず、
とか思いながら、ボーっと気を抜いたまま名探偵を見送っていたら、

「あ。暗号はまたくれよ？」

と、ポツリと言い残して帰って行った。

ちょ、不意打ち！ そんな嬉しいこと、去り際に言うなんてズル
くね！？ そんなこと言われたらオレ、頑張っちゃうよ！？ 名探
偵を満足させる暗号作るのが、実は結構大変なんだけども。

それから、今までと同じように暗号を届ける日は続いた。

そして、今夜。いつもと違う言葉をいきなり発してしまった自分に、心の中で小さく舌打ちしながら、固まっている名探偵を見て首を傾げる。

「……名探偵？」

呼びかけるとビクリと肩を震わせ、

「オメー、今何て言った？」

と呟いた。

「だから、鬼ごっこをしない？ って」

「聞き違いじゃなかったのか……」

え、そんな心配してたの？ 心外だなー。

「実はちよっと前から考えてたことなんだけどね。思えばさ、名探偵と追いかけてこするの、すごく楽しかったんだよねー。スリル満点っていうかさ。そう思ったこと思い出したら、またしたくなっちゃってさ」

「……」

あり、無反応。

「……名探偵？ オーイ？ 何か反応くれないとキッド困っちゃう」

名探偵の前まで行って、目の前で手を振っても無反応だったからふざけてみたものの、まだ固まっている。えー、本当どうしちゃったのさ。なんかオレ1人で恥ずかしいじゃん！

「……キッド」

お、ようやく反応が！！

「ん？ 何、名探偵」

ニコニコしてるだろうなーと思いつつ、聞き返す。

「そんなに近づいて、オレに捕まりてーのか？」

「え、何がどうなってその結論？」

「うるせー！ 大人しく捕まりやがれ！！」

「ちょ、ええ！？ タイムタイム！」

POM☆と煙幕を咄嗟に張って、少し名探偵から距離を置く。ビツクリしたー。

「ちょっと待って名探偵。捕まれてどういう意味？」

「はあ！？ 意味も何も、そのままじゃねえか！」

「あ、さっきの鬼ごっこのことじゃなかったのね」

何だ、お返事かと思ったのに。

「詳しく話せ」

「うーん……詳しくっていうか、そのままなんだけど。逃げるのはオレ、追いかける鬼は名探偵。捕まえるのは……“昼のオレ”って

こと」

「……は？」

「だからー、“昼のオレ”を捕まえてよ名探偵ってこと」

うーん、混乱してるねえ。名探偵の思考が手に取るように分かる。

「名探偵……すごく失礼なこと考えてるでしょ」

「な、何で分かつ……や、何でもねえ。それより、理由は？ そんなこと言い出したのは理由あんだろ？」

「えー？ 理由ってさっき言ったじゃん。スリル満点って。またスリル味わいたくなったの」

「……それだけ？」

「それだけ」

……じゃないんだけどね。これは別に名探偵に言う必要なんて無い。

「……バカだなコイツは。どこの世界に怪盗の正体を捕まえろっていう怪盗がいるんだよ」

「え、ココに」

「な、何でオレの考えてること分かんだよ！？」

「いやいや。名探偵全部口に出てたし」

あ、ムツとした。

「……。冗談、とかじゃねーよな？」

「まさか。そこまでバカじゃねーよ？」

あ、今度は半目になった。

「今、その通りじゃねえか！　とか思っただろ。まあいいけどさ」
「いいのかよ！」

自分でも妙なこと言ってるって自覚してるからな。

「鬼ごっこのルールは至って簡単。今日から3日以内に“昼のオレ”の前に現れたら名探偵の勝ち。無理だったら負けね」

「オメー、現れたら普通に認めるのか？　自分が怪盗キッドだってこと」

「そりゃ、そういうルールですから？」

「“昼のお前”を知って、オレが警察に行かない保証あんのかよ？」

何をおっしゃいますか。

「名探偵はそんなことしないでしょ。現行犯ならともかくね。それに、ゲームに他人を介入させるのはいけないんだぜ？」

「……。3日以内、ね。そんなに時間くれんだ？」

「余裕だねえ、名探偵。当てでもあんの？」

「企業秘密だ」

「楽しみにしてるよ、3日後。それじゃあ、今夜は失礼するね」

思わず少しだけ笑ってから、いつものようにハンググライダーで帰った。

それにしても、今日は自分の失態に舌打ちしたくなる。本当は、こんなこと言うつもりじゃなかったのに。口に出してしまえば、止

まるはずもなかった。それに、コレは賭けだ。

名探偵の力を信じてないわけじゃない。期間が無期限なら、必ずオレを見つけ出さだろう。彼はそういう人間だ。でも、日を決めたら……、もしかするかもしれない。その時はその時だ。

全ては名探偵にかかっているというわけだ。

前編―sideキッド―（後書き）

遅くなりまして、申し訳ありません！！！

こんにちは、そしてお久しぶりです。ペロコです。

ああああ……、本当に申し訳ないです。大変お待たせいたしました。
前編のキッドさん編です。

短い短編だから、すぐに終わります、……とかふざけたこと言ってた自分を殴ってやりたい！！ 1ヶ月……どれだけ生殺しさせれば気が済むんだって話ですよ。本当にスイマセン。

こんなんでも楽しんでいただけてる人がいらっしやるというのに……ペロコは期待を裏切っていないでしょうか。不安で仕方ないです。

前編の新一さんサイドでは分からないこともあったかもしれませんが、怪盗さんからの視点によって少しはその謎も解消されてたら……いいなと思います。↑希望。

結局分からないままのところは、もちろん後編にということになります。ああ、またしても生殺し！？ 本当、スイマセン。

実は、こんなことを言い出したのにはそれなりに理由があった、ということだけは理解していただけてたかなと思います。今回の基本的には新一さんの時の裏話のような感じだったので、特に進展なんでしょう。

後編の更新、いつになるのか分からない自分が情けないですが、気長にお待ちいただけたらなと思います。

完全復活宣言、……解除するかもしれません。やっぱり厳しいです、執筆時間取るのって。

出来るだけがんばってみるつもりですので、これからもお付き合いいただけたら嬉しいです。

中編（前書き）

大変長らくお待たせいたしました！

久しぶりの鬼ごっこ更新です。中編というまだ完成してない段階ではありますが。（意見ありがとうございます！）

とりあえず、出来たところまででもと思いついて。

お楽しみいただけたら嬉しいです。

中編

授業はつまらないから受ける気がしない、と言うのが快斗の自論だった。問題を答えるように言われても、寝たまま答えた快斗に教師達もとうとう諦めて、快斗は授業中に寝ていても怒られることはなくなった。ただ1人、生真面目に幼なじみの青子だけが快斗に怒っていたのだが効き目は全く無かった。

そして、今日も1日寝て過ごし、HRも寝ていた快斗は、普段とは違う教室内の雰囲気意識が浮上した。何やら騒がしい。先生がまだ来てないからかと思ったが、どうやら違うらしいということは快斗の元へと興奮気味にやって来たクラスメートたちによって判明した。

「おい、黒羽！ 起きろ！」

「おい！！ 寝てる場合じゃねーって！」

「んー……？ んだよオメーら。オレ、寝たいんだけど」

「1日中寝てたヤツが何言ってるんだよ！ それどころじゃねえんだって！」

「ビッグニュースだって！」

「はぁ……？」

まだ半分寝つつも、ようやく机から頭を上げて2人を見た快斗に、勢いよく2人は声を揃えて叫んだ。

「「工藤新一が来てる！！」」

その2人の叫びから約1分間快斗は今言われたことを寝ぼけた頭で必死に理解しようとしていた。そして、秒針が1周した後、

「……は？」

とだけ声を発した。快斗が理解するのを根気強く待ち続けた2人は、快斗の反応に特に文句を言うわけでもなく、さも当然だと言わんばかりにサラッと流し、続けて言った。

「そうなんだよ、何か校門の前に立ってたらしいんだけどさ」

「誰かが気付いて、ちょっとした騒ぎになって先生たちが行ったらしくて」

「で、今は校長室」

「は？ 校長室？ 何で」

「そりゃ見栄とかじゃね？ それか校長が工藤新一のファンか」

「いやいや、校長ならどっちかと言うと工藤有希子のファンじゃね？ 世代的にもさ」

「あー、ありえるな」

会話の後半なんて快斗の耳には入っていなかった。工藤新一がこの学校に来てる……？ もしかして自分に会いに来たのか？ 何か事件が起きたなんて耳に入ってきていない。ということはやはり……。

「で、だ。黒羽」

「……んだよ」

「「お前をスパイに命ずる」」

「……は？」

「だからー、校長室に行って何の話してんのか聞いてきてほしいんだって」

「ホラ、事件とかなら何か事情聴取とかすんだろ？ 1回ぐらいさ
れてみてーじゃん？」

「そのためにはどんな事件なのか知っておかねーとな」

事情聴取をされてみたい、というのもどうかと思ったが、今はそこはあえてスルーして。

「だからって何でオレが……！」

「決まってるだろ、黒羽の方がそういうこと慣れてるだろ？」

「お得意のマジック使ってちょちよいのちょいじゃん」

「お前らオレを何だと思ってんだ……」

「『有能な部下』」

「……部下になったつもりは一切ねーけど。ま、オレも気になるし、
いっちょ見てきてやるよ！」

「さすが黒羽！」

「頼りになるぜ」

調子のいい友人たちに手を振り、ほとんど何も入っていないかばんを持って教室を後にした。向かうは、工藤新一が行ったという校長室。と、その時。校内放送が流れた。

『2年B組、黒羽快斗くん。至急校長室までお越しください』

「は？」

何だ、隠れなくても堂々と乗り込んでもかまわないってことですか。手間が省けてラッキーなどと快斗は楽観的に考えながら、足取りも軽く校長室へと向かった。

実のところ、校内様々なところは忍び込んだりしているが校長室

に入るのは初めてだったりする快斗は、

「うは、校長室初体験ってか。まあ外から見たことはあるけどさ」

などと呟きながら、校長室のドアをノックした。中から返事が聞こえてから、快斗は失礼します、とだけ言ってドアを開けた。

入り口を入れて正面に校長の机があり、その手前に向かい合ってソファが2脚とガラステーブルがあった。快斗から見て右手に校長、左手に工藤新一が座っている。

澄ました顔してまあ……、などと快斗がチラリと新一に目を向けるが、向こうは気にすることなく前を向いたままだった。

「何でしょうか」

間延びしたような声で快斗が呼び出しの理由を尋ねる。今の自分は、放送によって呼び出されたからここにきたのであって、わざわざ調査に派遣されたことを相手に悟らせる必要は無い。さらに言うならば、ここにいるのは『黒羽快斗』であって『怪盗キッド』ではない。工藤新一が一体何の目的でここにやってきたのか分からない以上は、下手に動くのは得策ではない。

「君が黒羽くんだね。こちら、君も知っていると思うが、工藤新一さんだ。彼がどうしても黒羽くんを呼んでくれと仰ったので呼んだんだよ」

人の良さそうな校長は、椅子に座ったまま快斗を見据え微笑みながら答えた。

「工藤新一です。突然お呼びして申し訳なかった。まだ学校に残ってくれてよかった。もう帰ったら家まで行かなければならないところだったので」

「……どうも。黒羽快斗です。で、えっと……、オレに何か用？」

どうも『名探偵』仕様の工藤新一は苦手だ。ここまで丁寧に話されると背中がかゆくなる。今のオレは単なる高校生、という暗示を心の中で行いつつ新一の訪問の目的を尋ねる。

「その前に。校長先生、席を外してもらってもよろしいですか？もし出来ないのであれば、僕は彼を連れて彼の家まで同行いたしますが」

「そうですね。この後ここに来客があるので、出来ればそうしてもらえるとありがたいかな」

「分かりました。では黒羽くん。申し訳ないけど、ちょっといいかな」

「え、あ……うん」

校長の前では出来ない話だというのだろうか。わざわざ快斗と歩いてまで話したい内容……、人に聞かせたくないのか、それとも。

……聞かせてはならないのか。

とりあえず、快斗と新一は校長室を後にして並んで校門をくぐった。その際、多くの注目を集めていたのは言うまでもないが、2人ともそんなことなど気にせず前だけを見据えて歩いていたという。快斗を調査に派遣した友人たちもまた、2人が並んで帰って行く

ところを目撃したが、彼らは明日本人に直接聞けばいいかなどと、のんきに話していた。

中編（後書き）

……というわけで。こんにちはペロコです。

鬼ごっこ、久しぶりに書いてみましたがいかがでしたでしょうか？この話を連載としてスタートした段階では一応終わりのほうは見えてました。それは前から言ってたと思うんですけど。

ただ、問題は『間』が埋まらなかったことです。時間が取れなくなったこともありほったらかし状態が長いこと続いてしましまして本当に申し訳ありませんでした。

しかもまだ完結してないっていう。（笑）

とりあえず、新一さんと快斗さんの遭遇だけは済ませたかったのである意味予定通りといえますか。この『中編』として更新するまで要した時間は、それこそ前編を更新してからずっとなので、：約1年になりますね。書き方、雰囲気などなど前編とかなり違っていかもしれないし、もしかしたら期待していた話の流れとは違うかもしれないですね。

でも、『今の』ペロコが書いたお話であることには違いありませんので。

なるべく早く後編として更新できるように頑張ります。でも次はキッドsideにそろそろ手を出さないとあっちもヤバイんだよねー。とか迷うことは多々あります。メモリアルデーだって、1日1日過ぎていくにつれて快斗さんの誕生日が近づいてくるわけですし。（全く考えてないけど！）

次、一体どのお話が更新できるか自分でも分かっていますませんが、これからもこんなペロコのお話を読みたいと仰ってくれる方がいる限りは頑張って書いていこうと思いますので、これからよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8262h/>

鬼ごっこ

2010年10月8日22時32分発行